

菊池真紀さん(33)のこの5年ほどの日課は、二女の莉穂さんと一緒に地元の梁川小学校に通うことです。

莉穂さんは出生時、先天性髄膜瘤という重い病気と診断され、24時間以内に手術をしなければ助からないという状態でした。「手術の成功は五分五分。成功しても一生寝たきり」と医師に宣告された莉穂さんでしたが、今は車いすを利用して元気に学校へ通っています。

真紀さんが学校に付き添うのは、莉穂さんのたんを吸引したり、酸素吸入したりする必要があるからです。莉穂さんが小学校に入学した当時、医療行為が必要な児童を受け入れる養護施設が盛岡にしかなかったため、付き添いを条件に地元の小学校へ入学することができました。

現在は体力も付きそれほど必要なくなりましたが、病気の影響で肺の機能が弱く、幼少時には約15分おきにたんの吸引が必要でした。もちろんこれは寝ている間も必要だったのです。

「目の前の現実には必死で、あまりよく覚えていないんですよ。とにかくたんの吸引が自分の仕事なんだと思っていました」と当時を振り返って真紀さんは語ります。



必死で現実と向き合う

「自分をさらけ出すことが解決への1歩」

## 苦勞しているのは自分だけじゃない

### 菊池 真紀さん

きくち まき

重い病気のある二女を介助しながら、地域の行事、地元の農産物加工グループなどにも参加している。夫、子ども3人、夫の両親の7人暮らし。江刺区梁川字鳴谷在住。33歳。

自分1人だけではない

そんな真紀さんの気分転換は地域の婦人会の会合でした。「最初は不安でしたよ。みんな自分の親と同じような年代の人ばかりでしたし。でも反対にみんなから娘扱いされることで、知らないことは何でも聞くことができたし、自分をさらけ出すことができた。自分だけが大変なのではなく、みんな地域に支えられているんだと感じました」と言います。

莉穂さんの介助に当たってもこの考えを貫いています。周囲の視線が気になって閉じこもりがちになるところを、あえてさまざまな場面に連れ出しました。今では地域の人から声を掛けられることもあります。

家族の献身的な介助と奇跡的な生命力で、莉穂さんは重い病気と共生しながら、明るく、素直に成長しています。しかし成長した今でも、ちょっとした病気が命の危険に直結してしまう状況は変わりありません。

一度しかない人生を常に全力で生きている菊池さん親子の次の挑戦は、補装具を着けて歩くこと。「いつも行き当たりバッタリのように思われますが、確実に前に進んでいます」と話す真紀さんの表情には、自信と確信があふれていました。

工業製品としての鋳物

水沢区羽田地区――。

ここは古くから鋳造会社が密集した「キューボラ（鋳物を作るための鉄を溶かす溶解炉）のあるまち」です。今でも50を超える工場が市伝統の鋳物産業を支えます。

「伝統である鋳物の良さを守りながら、常に進化し続けたい」。㈱及精鋳造所の若き後継者・及川敬一さん(33)はそう話します。

及精鋳造所では、鉄瓶や風鈴の製造も手掛けますが、工業用品や車両部品などの工業製品を主に扱っています。及川さんは400年の歴史がある南部鉄器だけでなく、工業製品としての鋳物の可能性に目を向けます。

羽田地区で作られた鋳造製品は国内はもとより、世界各国に輸出されています。「鉄瓶などに代表される伝統工芸品としての鋳物は誰もが知っているものであり、日常的な利便性とデザインとの奥深さなどから、華やかな部分が目立ちます。対して、工業製品としての鋳物は、製品の部品となるので目立たなくあります。しかし、その目立たない鋳物部品がなければ自動車は走りませんし、農業機械も動かないのです。その役割は非常に重要なものです」

「世界で必要とされるモノ作りに自信と誇りを」

## 鋳物の可能性信じ常に進化を求める

### 及川 敬一さん

おいかわ けいいち

19歳で鋳造所を継ごうと決心。大学卒業後は企業で工場の生産ラインの仕組みや工程を学ぶ。㈱及精鋳造所常務取締役。両親、弟、祖母の5人暮らし。水沢区羽田町字堀ノ内在住。33歳。

伝統生かしつつ進化を

同地区には平成14年、市鋳物技術交流センターが開設されました。ここは鋳物製品の品質向上などを目的とした試験研究施設です。ことし1月には岩手大学工学部の研究機関も設置され、鋳鉄研究の高度化や地元鋳造業者との連携が図られています。

この効果について及川さんは「産・学・官の連携により密接になったことにより、鋳物技術の向上に非常にプラスになっています」と言います。従来、顧客ニーズに合った製品を試作する際は、自社だけの実験のため限界がありました。現在は、より専門的で高度な知識を持った大学からアドバイスを受け、充実した試験装置での実験が可能になりました。これは常に進化を求める及川さんの姿勢と合致します。「お客様のニーズは常に変わり続けます。常に勉強しながら、変化に対応できる知識と経験を積み重ねる必要があります」と努力を惜しみません。

「わたしたちが作っているものは、世界中の人たちに必要とされているという自信と誇りを持って鋳物に携わっていきたい」。鋳物産業の明日を背負って立つ及川さんは、目を輝かせながら今日もキューボラと向き合います。



伝統的工芸品である南部鉄器でも、常に新しいデザインを研究